

幼 兒 教 育

第十九卷
第十一號

大正八年十一月五日發行

フ レ ー ベ ル と 現 代 思 潮

|| 第二回全國幼稚園關係者大會に於ける講演の大意 ||

京都帝國大學教授
文學博士

小 西 重 直

○ フ レ ー ベ ル の 思 想 と 現 代 の 教 育

今や世界の大戦以來、教育全般の社會にも改造の聲が喧しくなつた。この聲は幼稚園教育の上にも及んで種々の研究がなされる事になつた、而して此處に幼稚園と云へば必ずフレーベルが引會ひに出る。しかもこれ迄はフレーベルを尊敬したが今や改造の聲が盛んになつてフレーベルがどうでもよい様になる傾向がある。と云つて其の關係がはつきりと絶たれてもゐない、つまりフレーベル思想の處分がよく出来てゐない、これでは改造と云つても思ふ様に出

来るものでない。そこで私はフレーベルの思想と現代思潮と如何に關係するかを考へその結論としてフレーベルの思想のよい所は之を充分に現代思潮に鑑みて助長しその誤れる點を捨てる事に躊躇しない、つまり私は如何に處分するかと一言に云へば即ちフレーベルの思想は其根本に於ては生かして行きたいと思ふ。其理由を以下順を追ふて述べて見やう。

○フレーベルの思想は萬有在神論
今、フレーベルの思想の根底をなせるもの、その背景となつてゐる時代及其思想について少しく考へてやう。見

紀元五世紀の初めにシメオン、スタイライテーツと云ふ人は丸柱の上につて修業したと云ふ基督教信者であつた。しかも其柱を人が見てはうるさいとて終りには高さを六十尺にして鎖でその上に體をしぱりつけてその上に三十七年間坐した。又、一晚中手をのばして空を仰いでゐた。或はある人の數へた所によると頭を膝の所まで一千二百四十四回も下げたなどと云ふ事が傳へられてゐる、これは一例であるがつまり當時の基督教では難行苦行をすれば神の國に行けると云ふ信仰があつたので、其人生觀は身體及自然界物質界と精神とを別々に切りはなして考へ經驗界物質界には厭世的の態度を取つたのである。其後中世紀の終り頃には勿論宗教に根底は置いてゐたが身體の力もみとめる様になり、殊にかの市民教育の起るに及んで經濟生活に重きを置くに到つた。かくて近世の初めに於ては謂ゆる人文主義、文藝復興の時代となり神本位の思想から人國本位に變つて來た之を教育上で云へばかの啓蒙時代には人間の理性の力のみとめるとともに物質界にも敬意を拂ふに到つた。この考へ方を系統的に發表したのが即ちフレーベルである。

元來フレーベルの思想は人間のこの世界に於ける地位及活動の本質と云ふ事が根本であるがこれは文藝の方ではかのローマンチック時代哲學の方ではカント、フイヒテなどの理想主義に影響されてゐる。ことにフレーベルが一番多く影響をうけたのは、シエーリング、及クラウゼの思想と思はれる。フイヒテは人間の自我以外に大我とも云ふべき大なる方の活動を認め、その本位とする所は我であるとする。シエーリングは自然及人間の精神の本體は同一で人間の精神は「自然」が發達して意識が出來此處に自我が出来る、即ち同一なる根本から出て居るが故にこの世界には反體はなく根本に於ては調和的統一のもののである。と考へるのである。又クラウゼは其特色とする所は宗教論にある、しかも萬物の中に神ありとするので、萬有在神論となへた。一體宗教上、神と世界との關係に就ての見方が、世界の外に神ありとする有神論と萬物の中に神が内在してゐる、萬物一つ一つが神であると云ふ汎神論とがあるがクラウゼの説は云はばこの二説の調和をはかつたので即ち世界は神の中にある、しかし神は世界のみならず世界以上にも絶對にある、萬物に内在ししかも萬物

を超越すると見るので自然及人間の理性の根源は神から来る、この兩方を完全に統一して調和する所に人生の完成がある、現實の人間はこの調和が出来てゐないがしかもこの調和に向つて努力するのである人間には生れながらに理想がある、しかしその理想が全體的でなく且小なるが故に之を大になさんとして此處に活劇がおこるのである。とクラウゼは考へる。

扱、これをフレーベルの思想について考へて見やう。フ氏の考へでは神が世界を支配する根源であつて神は世界の中にある、しかも萬物はまた神の中にも神は萬物を超越して支配する、自然にも精神にも神性がある、この神性が萬物の根源であつて、しかも人間は意識及自由獨立の精神力を持つてゐる。教育は人間の理想、力の弱い神性を次第に自覺させて、之を自己の力で發展させて行くのにある。と考へこの神性あるがために生ずる力之をフレーベルは自己活動となづけたのである。そこでフ氏の云ふ自己活動はやはり神性そのものであつて、神が之を與へた、神は絶對であるが自己表現のためにやはり働くものであると考へる。且自己活動は自己一人を

眼中におかず社會的の見地を有し他を斥けての自己發展ではなく、他人の力、權利、活動をみとめて自己が働く時に初めて本當の自己活動がある、之を其の發達の段階によつて見れば先づ人間は内面的のものを外面的に發展させる(例へば遊戲の如き)次に、進んでは外面的のものを内面的にもつて来る、(知識)更に内外の兩方を統一的に見て自然と人間、神と我との調和統一をはかり自己の意識の上に之を統一する。この人間の有する神性を完全にする事が之即ち教育であると考へる。しかもフ氏はまた宗教と労働との關係を考へて、宗教なしの労働は器械的に荷物を負ふ動物に過ぎぬ、又労働なき宗教は空虚なものである、神は又自己實現のために労働してゐるこの神性がまた人間につたはつて社會の實際生活にふれて来る。労働と宗教と節制とあらば天國は實現される。謂ゆる労働は實際社會に於て奴隸生活から開放されるものであるとする。こゝにフレーベルは内面生活上の宗教生活と外界の仕事とを統一して内面生活の獨立と實際生活の運命との統一を見出した。これらを合せ考へて見るとフ氏の人生觀は、各人神性を有し且その上に又神ありとするので即ち萬

有在神論の大なる影響をうけて居ると云へると思ふ。

○現代思潮如何

以上大體フレーベルの思想を考へたがそれと現代思潮との關係を考へるには、先づ現代思潮そのものについて知らなければならぬ。之は實に多方面であつて一言に云ひつくす事は出来ないが私は之を大體に先づ次の様に考へる。即ち我々の活動する實生活の背景となつてゐるのは

(1)自由の獲得と云ふ事……であるこれは實に意識的にまた無意識的に我々にはたらくのであつて自由は人間本性の意志及其の統一性の根本は法則をつくるものである。すべて人類全體に價値あり且眞實なるものはこの自由が根本となつてゐる。勿論ごく發達しない幼時からこれがすぐに充分にあるとは云はれない。しかし先づ衝動から初まつて之は次第に發展するの之には大體四つの段階がある。第一階段は衝動、第二階段は選擇の自由(淺き反省)、第三階段は悟性的の自由(反省が深刻となるが部分的である)第四階段は理性的の自由(此處に於て本當の意志の

自由が働く)、この第一段のものは例へば咽が渴くと云ふ様に全く衝動であるがしかもその中に人間として其の生活構成のための目的あり理想もあるが、たゞそれが無意識であり自由が偶然的でありしたがつて狭いものである。それが次第に進歩して第四階段に達すれば初めて完全なる自由になるのである。經濟的方面を考へて見ても衝動的による利益はごく低いものであり、工夫によるもの其結果は進んだものである。實際、衝動によりて偶然的になつた財産家は價値判斷の上から見て價値少なきものであるこれは一例にすぎぬが實際我々はあらゆる方面に於て自由の發展に進まんとし之の獲得のために意識的に無意識的に活動すると考へる事が出来る。

(2)同類の感情、異類感情……人生の歴史の上から考へて見て國家學者社會學者は今日種々の方面から人間を説明するが此處に私は、同類感情異類感情が人間生活の大切な部分をなして居ると思ふのである。この感情によつて一般に生物間に團體と云ふものが出来て来る。同じ器官を有するものは一つの刺激に對して相似たる感情をおこす。例へば馬は草に對して食慾をおこす、しかし人間は草に對して何と

も思はない。この意味で生活の習慣が出来、人間は人間同士集り動物は動物同士集まつて互に他から我が團體を保護しやうとする様になる。更に人間同士でも人種による同類感情から他人種の排斥が起り、それのみならず進んでは血族的關係の同類意識がおこつて一方と結び他に反抗する様になる。又文化的の同類相結んで異なる文化の働きを争ふ事も起る。昔からの歴史を考へて見ても又將來の事を想像して見てもこの種の争ひの種々のあらはれを見る事が出来る思ふ。

(3) マルクスの唯物史觀：近來やかましく云はれてゐるマルクスの唯物史觀と云ふ見方がある。序に考へる事は一體マルクスとフレーベルとは縁故があるのでフ氏があの「人間の教育」を書いた時には獨乙では革命が起り、フ氏自身も政府から革命者と思はれたのであるが、マルクスが社會主義の宣言書を書いたのはフ氏の死ぬ數年前の事であつて、この兩氏は同時代に居つた人である。

マルクスは謂ゆる人生を唯物的に見て、即ち人間の生活を歴史的に事實的に見ると生産の問題に由つてきまるとしたのである。人間の歴史は生産の如何

が根底で、これに由つて社會生活の理想もかはる、グリークの昔には奴隸のみが實際の働きをした、中世紀には親分、丁稚と云ふ様な階級の生活があつた。近世はまた資本家と労働者との階級になつた。マルクスは人類の歴史をたゞ唯物的にのみ見たのであるが又、多くの學者は之を批評して單に理想のない唯物史觀を不可として居るが私の考へる所でも實際マルクス自身が考へた階級の戦争なども、先づ需要供給の考へを主として之から社會を改善する案をたてるべきで、勤勞そのもののみをきりはなしては考へられない。やはり其處に精神がなければならぬ。經濟そのものの中にも眞なるもの、善なるもの、美なるものがなければならぬと思ふ。また同時に宗教にしても經濟と密接の關係がなければならず物質界にもまた理想がなければならぬ。かくの如くマルクスの唯物主義は種々の點から批難をうける、しかし彼のとなへる階級平等の考へは現代及將來に大に事實の上にはあらはれて來るかと思はれる、たしかに今後階級戦争が盛に起る時期が來る。

○フレーベルの思想と現代

思潮との關係

私は以上大體現代思潮の大勢をごく大攪みに三つに考へたのであるが、私としては人間をマルクスの様に見ずにはやはり理想的に見たい。人間各々の有する個性、その自由を完成させたい。之を導きこの働きを意識的にする所に教育があると思ふ。

甲と乙とが兩方平等になつても單にそれだけでは兩方が自由になつたとは云はれない。眞の自由とは兩方の理想を實現せんとする生活が甲と乙とに共同の目的に向つて進むものでなければならぬ。この共同の價值を見出して行く此處に平等の眞意がある階級戦争と云つても一階級だけが他の階級と違つた目的で互に他を拒まんとする争では價值はない、兩階級の眞の争はそこに共同の理想、共同の目的をもつて、之に向つての互の争でなければならぬ。この能度をフレーベルは神性ゴットヘイトと云つて居るがこの理想的自由を獲得せんとする過程プロセスが大切である。カントは他人の人格を認めよと云つたが、更に一步を進めて、我々の行が他人の行と關係して世界的、一般的の價值を持つものとなり、此處に互に共通點を有し

て互の價值を保ち得てこそ初めて眞の自由が出来るのである。即ち部分的から一般的。統一的の人生の見方、フレーベルはこの全體の統一的の態度を神性とよび之の發展をつとめた所に氏の思想の眞價がある。

原始民族には生活難がなかつたのではないが、しかし生活が簡單であるのでその感が少かつた、しかるに文化の進むにつれて生活は複雑となり道德上の種々の事が加はるためにこの感は實に深刻になつて來た。したがつて之が救済にも大なる力を用ひねばならない。それには即ち各自人間が互に價值あるものに向ひての努力をなし大きなものを攫むために力をつくし共通せる理想に進まねばならぬ。皆共同一致して力を大にせねばならぬ。既に孤立の時代は過ぎ去つた。この意味でフレーベルが謂ゆる神性なるものが人間にそなはり之を大きく育て、行かねばならぬと説く所に私は面白味があると思ふ、即ちこれが現代思潮に於てもフ氏の説の價值ある所である。しかし之を養ふその實際の方法に於てはフレーベルはあまりに其態度が平和過ぎたと思ふ。かの「人の教育」をよんで見ても丁度春の天氣のよい時に花の咲

き鳥のうたふのを聞く様な感じがする。私はかう思ふ。

(一)人間の自由意志と云ふものは謂ゆる神性など、云ふ内容となるべきものを最初からもつて居るのではない。その内容は經驗から來るのであつて、實際生活をして行く中に其の内容は或は神性とも或は動物性ともなり得る。この自由意志は然らば何から來るかと思ふ問題になるとそれは神からと云つてもまた無理に神と云はずとも大我と云ひ或は他の大なる力と云ふ、それは名前は何とも云ひ得やう兎に角我々は自由意志を貰つてゐる。が自由意志は何處までも形式であつて、内容までも我々は貰つてゐると云ふ事は出來ない、こゝに於てこそこの自由意志の發展、その内容の充實のためには初めからそんなに平和に出來る事ではない、戦はねばならぬ、努力せねばならぬ。フレーベルは内容迄も神性の中に含めてしまつたので、その考へ方があまりに平和すぎたと私は思ふ、

(二)次にフ氏はあまりに神性と云ふ事を強めて考へたがために教育はたい之を啓發するにあると云ふ主義であるがしかし私は教育は單にひそんで居るも

のを開くにとゞまらず生活を構成して行くと云ふ事
でなければならぬと思ふのである。

しかし他方に於て今日の思潮として自我が自己活動によつて眞の本質をみとむるに至ると云ふ點に於て其人生の見方が餘程フ氏の思潮に關係してゐる。フ氏の謂ゆる神性の實現は私の云ふ自由意志の發展と云ふ事である。

要するにフ氏は其名著「人間の教育」の中で萬有在神論を取り、萬物には神の性があつて、しかも神はまた其以上にあつて萬物を支配すると云ふ考へであるが、此れを宗教から離れて考へる事は出來る、即ち我々は何か自分以上のもの、大我とも云ふものの中に自我が生きて居ると云ふ事が出來る。しかしその自我なるものの内容を制限すると云ふ事には私は賛成は出來ない。

フ氏の思想が部分的に事物を見ずに全體的統一的に見ると云ふこの態度は今日我々が即ち部分的の議論をやめて、共同的生活の價値を養はん考へ方に一致するのである。

○幼稚園に對する希望

私は以上述べし如くにフレーベルの思想の取るべき部分を受け入れ、改むべき點又捨つべきものあらば之を處分するに躊躇せぬものであるが此處に全體的一般の統一を重く見ると云ふ立場から幼稚園に希望として三つの問題を掲げやう。

(一)人間生活に於ける内面生活の結合

これは即ち言葉の問題であつて、フレーベルは宗教的立場から宗教、理科、言語の三つを修養上大切であるとし、即ち宗教は希望を、理科は確實性を、而して言語は生活の内統一の機關であると云つて居る幼稚園では成るべく小児が言語を事物に關係してあらはす様にし、機會ある毎に指導者は注意深く方言、發音などの矯正をする様にした。此頃早教育の問題が盛であるが天才的人は言語に早く熟達するとも云はれて居る。實際人間の精神生活の根底たる言語及其習熟については今後の研究問題として欲しい。

(二)幼稚園と小學校との關係に就て

この關係は何とかして解結をつけぬと幼稚園の發達上に困る事が多からうと思ふ。一體學校教育はその間に互に相關聯して共同的の動作がある譯で今日、

我が國に於ける幼稚園と小學校との間には此處に一つの橋を架けて之を調和する必要があらうと思ふ。

一昨年紐育のバルマー氏は小學校と幼稚園との關係その調和點についての論を發表したがその大要は次の様になる。先づ小學校側から幼稚園側に對する注文としては

(1)手工の時に一層獨立的態度をして欲しい。
(2)幼稚園に於ける訓練的の方面として、靜かにすると云ふ事に注意を拂つて貰ひたい。
(3)年令の制限を廢して能力本位によつて組を分けるがよい。

(4)米國紐育では二年保育であるがそれを一年保育とした方が寧ろ型にはまらず、興味が起る事が多い。

(5)國語に注意してほしい。

(6)讀み方、書き方を入れてほしい。

幼稚園から小學校に對する注文としては

(1)手工の時間を増加して欲しい。

(2)訓練上に、小學校では少し自由を與へて欲しい

(3)机腰掛なども、動かし得るものとし、遊戯談話などは幼稚園に於ける如く圓をつくつてする様にしたい。

(4) 一組の定員を減じて一層個性に應じた指導を與へる様にした。

(5) 作業の時には一層創造的でありたい。

(6) 小學校とする算術は、實際的のものは別として、

數そのものの取扱ひをも少し減する様にした。

以上の様であるが私はこの兩者の關係を一層密接にしたいと思つてゐる。小學校の立場から見ても一年生は今少し幼稚園に近づけるがよろしい。今の一年生はあまりに家庭生活から離れ過ぎてゐる様に思はれる。次に

(三) 幼稚園と社會との關係について。

幼稚園がもう少し社會的事業に關係する必要はあるまいか、ことに其地方地方の母の會に幼稚園が直接關係する事は誠に大切である。幼稚園に關する集會講演會には必ず母親も出席して實際幼稚園に従事する人々の如何に熱心であるかを知る丈でもよいと思ふ。又子守の問題についても幼稚園が手を出さなければならぬ。子守の教育問題は特に考慮して之を社會事業の一つとして實現する事は目下の急務である。

かくして我々はこの現代の思潮に棹さして之に逆

はず又之に押し流されずよく其真理のある所に着眼して行かねばならぬ。
(未校閱ニ文責在筆記者)

○玉成保姆養成所生徒募集

本年第三回の卒業生を社會に送り出した玉成保姆養

成所は既に明春の新學期入學者の願書を受付けて居

ます。新學期は四月十日開始。授業は毎日午後二時

より五時迄。尙同養成所の規則等詳細の事は同所々

長たるソフアヤ・アラペラ・アルウケン嬢(東京市麴

町區上二番町三六)宛に照會なされたらよろしいと

思ひます。